

## 品川駅の競歩

中央改札口を通過する手前になると我輩は臨戦態勢に入る。理由などは別ない。訳もなく体中の血が沸騰する。右肩に提げた黒い布カバンを右手で軽く押さえ左胸ポケットに入っている定期券（スイカ）を左手で摘まみ出す。足に力強さが乗り移って来た。右、左、右、左・二歩、三歩、・・五歩・・十歩、始めのリズムが肝心である。魚を追い込むような仕掛けのある十余の改札口へ集合する通勤者達を巧みに交わしながら立ち止まることなく通過すれば、まあ上出来だ。出来れば中央か右側の改札狙いである。横からすうーと割り込められたり前の人間に赤ランプが点いたりすると後方に続く我輩はいささか憚然とする。ましてやウロウロ立ちはだかる醜態を晒した挙句、後方に続く我輩にドスンとぶつかってくる態さまなんぞは（なにつ！）と舌打ちに近いような気分が生じてくる。プオーオンと赤ランプ警報が高鳴るのは大方が料金不足とか定期の期限切れ、更には路線違いのような理由に他ならないだろう。中には澄まして強引に駆け抜けしようとする不屈き者もいるが機械はそんな浅ましい人間をシャットアウトする。恥ずかしいくらい顔付きをせよ、とお節介を焼きたい。あの厚顔、澄まし顔は何か。朝っぱらから我輩も不快顔を見せるのは自分でもどうかと思うが例外になく険しい顔つきになってしまふ。たまにきちんとタッチをしないせつかち人間や切符で入って定期路線に繋ぐうっかり者がいる。これはまあご愛嬌でそう目くじらを立てるほどでもないけれどマゴマゴされるのにはやっぱり閉口する。理由はどうであれ赤ランプが点けば暫くは元の青ランプには戻らない。咄嗟に右か左への改札移動を余儀なくするか、それとも迷惑顔で佇むか、だ。気分を換えるのがひと苦労、つまり、競技意欲が削がれてしまふ。競技はスタート時が肝心ではないか、大袈裟に言えば今日一日の仕事の調子が左右されることだってある。そうそう毎日赤ランプに付き合わされる訳ではないけれど、だからといって不測の事態を侮ってはいけない。いつ何時なんどき、白々しい人間と遭遇しようとも限らない。生き馬の目を抜く、と揶揄された江戸の時代から三百年経っても人間のチマチマした本性は一向に変わらないのだ、いや、現代社会はそれ以上に慇懃無礼な社会を創り出している。

神田駅、午前六時四十六分通過の山手線に乗ると品川駅まで十四分で到着する。近場のエスカレーターで階上の中央改札口に向かう。天井からの大きな釣り時計が七時を指している頃だ。中央改札口からは百五十メートル余りのドー

ム型天蓋のある歩廊を、東口の都バス乗り場、①か②まで歩くのが目的、大井埠頭行き、大田市場行きの乗り場である。月曜日から金曜日の週五日間はこの決まったコースを繰り返す。品川駅は新幹線乗り継ぎが出来るようになったせいで駅を利用する人は多い。先年の再開発で都心からビルを新築した一流企業も目白押しである。早朝からキャリアバックの観光客らしき人々やスーツ姿の通勤者がゾロゾロと歩いている。この時間帯はまた、ブルーカラーと呼ぶ労働者が多い。派遣と呼ばれる勤労者達も中にはいるだろう。埠頭での港湾仕事や水産、農産物の市場で働く関係者のジーンズスタイル、スニーカーの作業服が目につく。我輩の会社の最寄り駅の神田周辺にはネクタイ姿の中高齢者が多いだけに品川構内の雑多な通行は或る躍動感を歩廊空間に与えている。尤も、今年六十八歳になる我輩も高齢労働者の一人に違いないから神田の街の云々は、少々おこがましい。

四年前、飯田橋仕事センター(都ハローワーク)から今の仕事を探し出した。小規模の物流会社である。仕事の内容は、神田の本社と大井埠頭にある出張所への書類運びだ。輸出、輸入に関係する貿易業務書類を一日三往復、都バスと山手線電車を使ってカバンひとつで運ぶ。社内では配達人、ランナーと呼ばれているらしい。至って単純、簡単な作業であり、煩わしい人間関係がほとんどない一人仕事が入り込んでかれこれ三年近く勤務している。服装も自由、ネクタイなどは着用しなくてもいいのだ。給料は格段に安いが正社員と同様な雇用条件であるから高齢者の就職としてはまずまずと言えるのだと今は家庭で実権を握ってしまった細君が高飛車に解説する。我輩はご尤もです、と相槌を打たなければならぬ。契約社員は半年に一度の更新があり、仕事の失敗もなく何回かの更新を重ねて今に至っている。

実は五年前まで我輩は都内ですし屋を商っていた。主として四十年、修業時代の五年を足すと都合四十五年、我輩のすし稼業は半世紀近くという歴史物である。しかし、晩年、お山の大将での経営の失敗から閉店に追い込まれて業界からすっかり足を洗った。つぶしの利かない調理人だったオレは何もかも自信を失い心からは覇気も無くしてしまった。憂鬱病という物の怪が我輩の周囲に霧のように纏わり付いた。だから、正直、朝の競歩と巡り会うまでは腑抜け人間の体たらくであった。しかし、人生には突然、思わぬ転機というものがやって来る。自分で創り出した競歩という些細な出来事を切っ掛けに我輩のふやけ

た生活感情の中に小さな意欲が点<sup>とも</sup>った。希望と云おうか張り合いとでも云おうか、高揚した感情が誕生したのである。さあ、それが我輩の言うところの、品川駅構内の毎日の競歩である。我輩が熱く燃えるところでもある。たかだか百五十メートル位に全身を打ち込む男伊達、我輩の心意気、こんな真剣勝負を誰も知らないのがちよっぴり悔しい。が、床<sup>ゆか</sup>しいのも美徳ではないかと密かに思う所以である。

ところで、何時から競歩ゲームにのめり込むようになったのだろうかと考えてみた。無論、この仕事を拝命してからだ、或る日、気が付いたら駅の構内を頻りに歩数を数えて歩いていたので。四十センチ四方のコンクリートタイルの繋ぎ目の目地<sup>めじ</sup>、処によっては市松模様のその二つを一つに数えながらグリーンと早足で進む。すると思わぬ発見があつたではないか、人々がどんどんと後方に置き去りにされて行く。群を抜く、とはこういうことなのかと突然快い気持ちがおレを刺激した。

世間では飽食の果てに健康ブームが到来した。一日に一万歩の散歩が有効であるという指南がテレビや新聞紙上に躍っている。すし職人一筋だった我輩が仕事を失い借金まみれのあかつきに辿りついたのは情けないことに毎日の過食だった。細君に再三たしなめられる日々、当然の成り行きであつたが腹回りは優に一メートルを超えてしまった。更に上が180、下は100台の高血圧症、医者<sup>いしや</sup>の忠告でテノミン錠25一錠を日々服用しなければならなくなった。であるから我輩にとって毎日の運動と食事の節制は生活の中で必須事項でもあつたのだ。であるから歩く仕事は正に天が我輩に与えた啓示、仕事とは云え徒歩運動は願<sup>ねが</sup>つたり叶<sup>か</sup>つたり、もつけの幸いと言う以外なものでもなかつた。

会社から神田駅まではほぼ700歩、山手線で品川まで行き、品川駅構内から東口バス停までが300歩、一日三往復すると結構な数になる。会社は一年、神田南にある司<sup>つかさど</sup>町から東口を歩く本町ビルに移転した。江戸時代の牢獄でお馴染みの伝馬町一帯である。ここからは総武線、新日本橋駅が近く、時間的には早く品川へ出られるのだが、歩くことを考慮して山手線の神田駅までの往復を変えずにいた。細かい歩数を合計するとやはり一日一万歩近い数字が出る。仕事でもない限りウチにいたらとても毎日一万歩を歩くことなど無理であろう。足を棒にし、(健康の為、借金の為!)と念仏じみた言葉を唱える我輩。仮初めにもギリシャ神話の(シジホッスの神話)などを連想してはいけない。山のように積まれている我輩の借金返済であるけれど。発想をプラス思考に転換すれ

ば毎日の単純労働も人生の終盤に巡り会ったビッグプレゼントと考えられる。・・・前向きにいこう！。

我輩は四十歳頃から週一、二回はプールで泳いでいる。それに加えてジョキングもやっている。健康管理だけは昔からバカに熱心だったが細君に言わせるとその熱心さを商売の方へ向けなさいと口を酸っぱく言われ続けた。ひとつ違いの姉さん女房は、商売だって熱心に働いていけば潰れるようなことはなかったのにと、愚痴とも泣き言ともつかぬ追い撃ちを掛けてきた。それは認めよう。やれ、ゴルフだ、飲み会だ、競馬、競輪と浮かれ歩いた事は反省もしているからだ。

すし人生におさらばしてから急に無気力な生活に陥った。体力、気力まで蝕まれていった。流行のメタボリック症候群に陥ったのである。風呂場の鏡に映し出される我が丸い肉体、それが又、我輩を苦しめる。水泳もジョキングも率先してやろうという気にならなくなった。それでも全く中止しなかった二つの運動、自慢ではないが我輩にも善いところがあると秘かに自負している。

この単純な書類運搬の仕事に就いた間もない朝、コンクリートタイルの目地を勘定しながら前に行く早足の青年に付いて行くと、なぜか急に、この若者に負けてなるものかという気持ちが一瞬と沸いて来た。若者は坊主頭を軽く左右に揺らしながら早足を運ぶ。カーキ色のジャンパーの背へ迫っていく我輩を完全に意識して歩いている様子だった。おっつかっつの勢いで我輩達は東口のバス停へ降りて行く。彼は②の大井埠頭行きバスへ飛び乗り、我輩は①の大田市場行きの行列の先頭に立つ。早朝はどちらに乗っても我輩の向かう（セントラルビル）前で停車する。三日目ぐらいになるとお互いが遠くに離れてからチラッと眺め合っている。ニヤニヤしたくなるような気持ちである。そんな競争を一週間続けた。若者は我輩の魂胆を見透かした挙句、バカバカしくなっただろうか、その後二度と我輩の前に姿を見せなかった。うっとおしくて時間帯をずらしたのかも知れない。そう云えば彼は、姿を消した前日の金曜日に途中で歩みを急に緩めたのだ。あれは我輩に対する痛烈な皮肉なのか。（俺は競争なんかしていないよ、朝っぱらから何でそんなに急ぐ必要がある、・・・）というメッセージではないかと振り返る。僅か百五十メートルの歩廊でその類いの事がしばしば起った。我輩が追い抜きに掛かると相手も然るもの、横並びの向こうで互いが負けまいと急にピッチが上がるのだ。我輩も絶対負けない、意地と意

地との衝突である。さりげなく様子を見ながら並列して歩く、歩廊出口寸前で猛ダッシュを掛けて競争者を脱落させる作戦だ。我輩のスニーカーは隠密忍者のように音も立てずに敵対するヤツを追い落とす。作戦は見事に功を奏す。実に小気味が良い。我輩は堂々と闘いを挑み競歩に連勝する。何の疾しさも後ろめたさもある筈がないから、この競歩を天下取りのような具合で実行する。時には女性のハイヒールがコツコツと靴音を鳴らしながら後方から迫ってくる。(生意気ではないか!)などと呟きながら音の気配でスピードを上げる。女性だからと甘く考えてはいけない、手心を加えてはならないと我輩の右脳が叱咤激励する。どうやら、吾輩の頭には男女均等法が未だ充分咀嚼そじやくされていないらしい。典型的な保守型の精神構造が宿っている。

歩廊の幅は十五メートルぐらいであろうか、その通路を九対一の割合で東口へ向う通勤者の群れ、【改札の混雑時は通路中央をご通行下さい、ご協力をお願いします】と頭上に大きな横断幕が掲げられている。であるから心置きなく後姿だけを目安に競歩を挑むことができるのだ。尤も追い抜かれている歩行者たちは、(ああ、何んとせつかちな、あわてものが前を行く)ぐらいに眺めているであろう。追い抜きざま、うっかり横後方から迫る早足を警戒しチラチラと横向きになると、ナナメ鋭い視線を全身に浴びた気がする。敵意のこもった空気が我輩を刺すみたいである。だから、せかせか歩きやクネクネ歩きはダメである。努めてフォームを美しく見せなければいけない。まっすぐ歩けるに越した事はない。腕の振りも美しく、機械のように正確なリズムで、一、二、三、四・・・と。結果、空いた中央歩廊をぐんぐんと突き進む。前で悶もえても自然に立ち止まらない、清流を泳ぐ鮎あなごのごとくスイスイと抜き交わす。これが堪たえられないのだ。こんな爽快で愉快なことがあるのかと胸を張る。これが病みつきになった最大な理由である。

中央改札口の直ぐ前方に見える北改札口、僅か十五メートルばかりの間の斜め四十五度の通行で我輩の競歩は幕を切る。この時間帯、京浜急行口である西口からの合流者は未だ少ない。ヨードンで始まる北改札口までの短い距離で既に我輩は十人は確実に抜き去っている。北改札口の合流する辺りでは向きを変更、中央通路をゆるい角度で一直線に東へ進む。ここが抜き去りの本命コースだ。黄色い塗料の覚障害者用のタイルが縦横たてよこ、帯状にそれぞれの改札口から長く延びて歩廊中央付近を走っている。早朝は一向にエンジンの掛からぬ通勤者達、一方、我輩の速度は全開である。北改札口から出て来た人々がどっと歩

廊へ吐き出される。新幹線、総武線、東海道線の到着であつたり、遅延、若しくは人身事故のトラブルで不規則ダイヤになることが原因らしい。梁の仕掛けのような北改札口から人々が吐きだされると誰もが一刻を争う気分のようなのだ。心理的に焦りを覚えるのかも知れない。混雑から早く開放されたいと云う錯覚が生まれるのだろうか、押しなべてセカセカしている。そこで我輩の出番である。闘争心にめらめらと火が付く。彼等や彼女等を目の中につかり捉えながら歩廊の中央をグングン、スイスイと突き放しに掛かる。三人五人、十人と尻目にする。百八センチの大柄である我輩は歩幅も大きい。普段のゆっくりした時は一步が五十センチ程度だが朝の歩廊での競歩は優に七十センチ以上の大股歩きだ。いや、八十センチを超える大股になっていくかも知れない。マイル二つ分が一步、二歩進めば百六十センチだ。それに自分で言うのもなんだが、ピッチが桁外れである。再々言うようであるが傍から眺めれば何を朝からそんなに急ぐのかと嘲笑を受けかねないが、人は人、そう思う人間にはそう思わせておけばいいと腹を括っている。但し、周辺には競歩に打ち興じているオジさんなどと悟られてはならない。早足があの人のリズム、そのように誤魔化さなければならぬ。その為には、姿勢を正して背筋を伸ばす、の歩きが最適である。心持、視線をやや前方に落としながらである。勝ち抜き競歩レースなどと、ゆめゆめ周囲に悟られてはいけない。

昨年、我輩は健康を慮って前立線ガンのPSA血液検査をした。さらには肛門から内視鏡を遣って大腸ガン検診も実行した。異常なし、の結果を得て懸念材料が解消したのは間違いない。だが、七十歳の古希寸前では何が起こるか分からない。人間なんて実に脆いものだからと思っている。

書類配達は、息切れもせず疲れも覚えず楽々に一日が終了する。永年の水泳とジョキングの成果に違いない。この分では競歩の選手になっても案外やっていけるかも知れないなどと身の程知らずに自惚れる。尤も、成人競歩は五十キロを目的とするらしいから幾ら丈夫なオレでも到底無理だろう。精々、三キロの中学生競歩か、十キロの高校生競歩ぐらいなら充分参加は出来そうだ、そう思うとノーテンキの性分が頭をもたげ、益々機嫌が上向き、朝の競歩に磨きが掛かるのだ。

夏の朝、左前方を足早に行くワイシャツの中年が視野に入った。男の足取りは軽快だ。手に持つものは何も無くグリーンと進んでいるではないか。目標が定まる。彼を追い抜くことで太股運びを全開、加速する。腰の動きが急を

告げる。加速を始めて二十メートルばかりの所でなんとなく抜き去った。大したことではない。しかし、油断は大敵である、相手が我輩の抜き去りを意識すると途端に変貌する輩もいる。追いつ追われつ終わりまで相手の動きに注意することが肝要なり、絶えず警戒を怠ってはならない。さり気ない歩き方が達人への一步であるとなら銘じている。『初心忘れるべからず、時々初心忘れるべからず、終に初心忘れるべからず』何でか世阿弥の（花伝書）まで頭に浮かんでくる。これは哲学である、などと口に乗せる。であるから眼は百八十度全開の水平視力になる。魚で云えばヒラメ、複眼の昆虫トンボのような、やぶ睨み状態になるのは致し方ない。元々人相を褒められたことはない。細君だって強引な泣き落とし作戦で結婚に漕ぎ付けたのである。だが、競歩に熱中する我輩にも人並みの人情はある。介添え人が伴う車椅子の人や白い杖を突く視覚障害の人がゆつくり歩いていると我輩は即刻、競歩を中止する。或る朝などは、前方に右足を引き摺って歩く若い女性を発見した。我輩は忽ちトップスピードを緩めた。その女性の脇を抜き去ることに何かしら不憫を覚えたのだ。我輩にだって優しさはある。自己満足にうつつを抜かして他人を傷つけてはいけな、と常々思っているからだ。だからそんな非情な行動は出来る訳がない。足をかき上げて歩く女性を斜め後ろから観察するとおかつぱの黒髪が片足を衝く度にフサフサと揺れる。スカートの後姿が見事だ。馥郁と匂い漂う香水、しばし、我輩はその優雅さに溺れる。正面からしっかりと尊顔を拝したい誘惑に駆られるが女人は菩薩か夜叉か、この歳になると直感がはたらいで、挙句に、興ざめのことが多いから我慢が肝心だ。中には豊満な胸元をこれ見よがしに曝しながら堂々とこちらへ歩いて来る女人に出会うと、中央通路を突き進んでくる不平より何よりも、年甲斐もなく我輩の視線はその胸元へ泳いでしまう。（何者だろう）一瞬、頭の中で誰何していると、つんのめるお粗末を仕出かす。いやはや、どうにも恰好がつかない。高齢者と言えども我輩も男、雑念を消し去る事は難しい。久米の仙人だって女性の白い脛を見て空中から墜落したと流布された逸話があるのは誰も知るところだ。況してや、凡人の我輩が競歩に集中しているからといって平常心を保つのは土台、無理である、心乱すのは当然ではないか、などと有らぬ言い訳を吐くのだ。いやはや、競歩からいささか脱線してしまっただが。

その朝は懸念も全くないほど格の違いを見せ付けて我輩は南出口の空中歩廊下までやって来た。出口まで二十メートルほど手前に南北の新幹線乗り場口がある。時折、その二つに分かれている乗り場を横切るお人がいる。加速してい



な赤黒の派手なネイル爪が巨人の背に絡み付いてサンバを踊るごとく蠢うごめいている。(ゴメンナサイ!、ゴメンナサイ!) 男のハスキー声が遅れて歩く我輩の耳にまで届く。男の豊かな尻がジーパンからはみ出すように脹らんでいて屈強な褐色の巨人はしっかりと彼女を包み込む。その瞬間、訳もなく我輩は完璧に打ち負かされたような気分気分に襲われた。早朝から何故か顔が火照ほてっていく。すると、我輩の下腹部に異常が起こつたのだ。(ああ、そうだ、我輩にはヘルニヤがあつたんだ) という厳しい現実が頭を駆け巡つた。泌尿器科での前立腺ガンの血液検査前、ぶつきら棒な若い医者からヘルニヤの指摘を受けていた。早めに手術をした方がいいとアドバイスがあつた。何のことはない、いわゆる、脱腸である。こぶし大の突起物が右下腹部に時々湧き出て来るのである。(そうか、ヘルニヤが我輩にはあつたんだ) ズボンの右に手を当てながら、すっかり忘れていたそんな恐れが一瞬身体中を走る。(筋肉が衰えたんですよ!) ドクターの遠慮のない言葉が蘇よみがえってきた。負けの原因は本当に脱腸だろうか、(筋肉が衰えた) 何んといやな言葉だろう、(いや、ちがう!ちがう!) 早足の強いヤツが世の中にはゴマンといる、そう考えるのが妥当だつた。あるまじき弱音が、繰り返すように我輩の口を吐いて出る。

百五十メートルくらいは時間にすればものの二分足らずである。朝の命運を賭けた一部始終が終了する。しかし、これは朝だけに限つた話であつて、一便の還りの十時半ごろはもう、こうはいかない。二便の十二時過ぎの行き還りも午後の一時過ぎ、三便の三時過ぎも競歩の出来る状況を与えてくれない。行き交う混雑限りなく、歩行者天国の様相では到底無理なのである。それと我輩の気力も朝のような全開モードは影を潜めている。朝だけが貴重な闘志を燃やす唯一の拠より所なのだ。

その日の夕方、自宅に帰つた我輩は久し振りにジョキングシューズを取り出すと早速、近所の公園へ向つた。早々に鍛えなければならぬ、そう決意したのだ。我輩の活力と闘志を再生させるため(鍛えなければ・)呪まじないのようなワンフリーズ(一言)の声を繰り返す。そうして夕闇の迫る近所の公園をヒョコヒョコと走り出す。既に今日はノルマである一万歩を歩いた上でのジョキングだ。さすが息切れがする、足がもつれる。しかし、あの妙齡なキリンさんも絶対打ち負かさなければならぬ、彼の青年にも太刀打ちしなければならぬ、雲衝つくような黒い巨人にも勝負を挑もう、塞ふさぎ込む余裕などはないのだ、弱音はご法度はつとである。明日も明後日あさつても、朝は必ずやつて来るのだから……